Gibson is Gibson

by Takashi Kawamata

Over the Gibson

Gibson(ギブソン)――エレクトリック・ギター、アコースティック・ギター、マンドリン、バンジョーなどの弦楽器に多少なりとも興味を持つ者は、このブランド・ネームを知らないはずがない。

なぜならば、ギブソンは、それらの弦楽器のマニファクチャーとして、永い間トップ・ブランドの座を保持し続けているからだ。

会社創立は1894年。約100年間にわたる社史をひもとけば、それは弦楽器というフィルターを通して語られるポピュラー音楽史に通じるものとなる。つまり、ギブソンは、その永い歴史の中で、これらの弦楽器の開発・生産において多くのエポックを残し、それが音楽シーンの動きに多大な影響を与える結果を生んでいるからだ。

そもそも弱音楽器と言えるアコースティックの弦楽器にとって、いかにしてクリアーで大きなボリュームのサウンドを得るかということは、その楽器の基本的な性能を左右する大きな問題であった。従って、ミュージシャンたちのニーズもその点に集中していた。

現に1940年代、エレクトリック・ギターを実用化するまでのギブソンも、ミュージシャンたちの切実な要求を満足させるためにこの点を基本的なテーマとして研究を重ね、新開発の革新的なノウハウを駆使したマスタートーン・バンジョーやfホール・アーチドトップ・ギター、ジャンボ・ボディ・フラットトップ・ギターなどの生産で、すでに技術力、信頼性、サウンドなどすべての面で他の追従を許さない、押しも押されもしないトップ・マニュファクチャーとして業界をリードする存在となっていた。しかも、ギブソンのこういった努力によって、これらの楽器の演奏スタイルが徐々に変わっていったことも事実なのである。

ちなみに、このビッグ・ボリューム、クリアー・サウンドの究極のテクニックとして生まれてきたのがエレクトリック・ギターの概念と言えるが、その開発や実用化に際しても、100年近くにもなるしっかりとしたアコースティック楽器製造技術の蓄積を持つギブソンは、他のメーカーの追従を許さないユニークな発想と芸術的とも言える木工技術によって、数多くの名器を世に送り出すことになる。

Classical Innovations

ギブソンは、1936年にすでにES-150(チャーリー・クリスチャン・モデル)というエレクトリック・アコースティック・ギターを発表していたが、一人の天才ギタリストとギブソンの優秀な開発スタッフとのコラボレーションによって1952年に世に送り出された「レス・ポール・モデル」は、それ以降のエレクトリック・ギターの開発に多くの啓示を与えるものであった。

たとえば、ラミネートされたソリッド・ボディ、各弦ごとに微調整可能なピックアップとそれをコントロールするアッセンブリーの形態、ゴールドメタリックという意表をつくフィニッシュ・カラー、それにトップ・ギタリストとの対話によってアイディアや実用性を高めていくという開発手法などである。

そして、このギターの成功によりエレクトリック・ギター開発の基盤を確立したギブソンの開発スタッフは、より先進的なノウハウとギターの開発へと前進していくのだが、その成果には目覚しいものがあった。

正確なピッチとテンションのコントロールを可能にしたチューン-O-マチック・ブリッジ・システム('54年)や、大出力を持ちながら雑音をカットすることができるハムバッキング・ピックアップ('57年)の開発、プレイヤビリティを追求したシンライン・セミ・アコースティック・ボディのES-335の発売('58年)、変形ボディの先駆的作品となったフライングV、エクスプローラー、モダーンのコリナー・ギター3部作の発表('57－'58年)、エレクトリック・ギターを木工芸術品のレベルにまで到達させたサンバースト・レス・ポール・スタンダードの発売('58年)、ステージ・アクションの制約をなくす軽量コンパクト・ソリッド・ギターのハシリといえるSGシェイプ・ボディの開発('61年)、量産された初のスルーネック・ボディ・ギターとなったファイアーバード・シリーズ・ギターの発売('63年)などと、'50年代から'60年代初期にかけては次々と新しい衝撃をギタリストたちに与え続けたのである。

こうしてギブソンは、すべてのギタリストから絶対的な信頼を寄せられるようになり、フル・アコースティックからセミ・アコースティック、ソリッド・ボディに至るまで、あらゆるタイプのエレクトリック・ギターを供給できる大メーカーとして業界に君臨する立場を手中に収めることになった。

Prestige in Rock

一方、1950年代初頭、ちょうどエレクトリック・ギターが実用化された直後に生まれてきたロックン・ロール・ミュージックでは、エレクトリック・ギターが不可欠な要素となっていた。つまり、ある意味では、エレクトリック・ギターの出現によってロックン・ロール・ミュージックの演奏スタイルが生まれてきたとも言えるのである。

なぜなら、白人系のカントリーやヒルビリー・ミュージック、黒人系のブルース、リズム&ブルースなど、ギターを中心としたコンボ・バンドによって演奏されるタイプの音楽をミックスして、より先鋭的なサウンドに発展させたこのスタイルには、ギター・プレイのニュアンスがアンプによって増幅され確実に表現できるエレクトリック・ギターは、まったく理想的な存在であったからである。

ビル・ヘイリー&ヒズ・コメッツ、エルビス・プレスリー、チャック・ベリーなどのロックン・ロール・アーティストたちは、エレクトリック・ギターをフューチャーした演奏スタイルで一世を風靡したが、このことによってエレクトリック・ギターの存在は一般的に知られるようになり、またエレクトリック・ギター・メーカーとしてのギブソンの知名度も飛躍的に向上することになった。

そして、これ以降、ロックン・ロール・ミュージックの出現からめめんと現在に流れるロック・ミュージックの歴史の中で、エレクトリック・ギターは常にそのサウンドの主役の座を保持し続けている。

しかし、ここで注目したいのは、ギブソンのエレクトリック・ギターが常にそのテクニックや演奏スタイルをリードする存在であったということだ。

ハムバッキング・ピックアップは、ディストーション・サウンドやウーマン・トーンを生み出し、SGギターは、ギターを投げる、ふり回すといったアクロバチックなステージ・アクションを実現させ、セミ・アコースティック・ギターは、ロックとジャズのサウンドを合体させたフュージョン・ミュージックを生み出し、ゴールドやサンバースト、レッドやブルーといった派手なフィニッシュ・カラーやユニークな変形ボディは、ロックのファッション化と切っても切れない関係にあったと言える。

しかも、いかにミュージシャンのテクニックや演奏スタイルが、その楽器のキャパシティや特性に密接な関係があるといっても、ロックのミュージシャンたちがそのキャラクターを活用する何年も以前に、そのような製品をプロデュースしていたギブソンの先進性には、驚くべきものがあるのである。

Post-Modern

こうして、ロック・ミュージックの発展と共によりポピュラーになり、より完成度を高めていったエレクトリック・ギターの開発は、ある時期から乱熟期の様相を呈し、古き良き伝統も楽器としてのロマンもあまり感じられない方向性に向かって行ったと言える。

より合理的にムダを排し単純化して、その曲、そのコンセプトだけに通用するようにデフォルメされたギターには、楽器としてのニュアンスをあまり感じとることができないからである。楽器(インストゥルメント)というよりもむしろ演奏する道具(ツール)といった意味合いの大きいギターでは、それぞれの楽器としてのアイデンティティも、伝統が年々と受けつがれていく継続性も、ミュージシャンが共にサウンドやテクニックを向上させていくという愛着心も感じられなくなってしまうだろう。

しかし、このような極限を超えた合理性(モダニズム)に対するフィードバックは、徐々に起こりつつある。

1987年、心機一転したギブソンにおいても、古くから培われたクラフトマンシップとその経験にうらうちされた確かな楽器作りの伝統をより強力に打ち出して、ミュージシャンとのスキンシップによるクリエイティブな活動を行なっていく方針が伝えられている。

他のエレクトリック・ギター・メーカーには類を見ない約100年の伝統と、常に先鋭を走ってきた技術開発の気風が、今後どのようなギターを作り出してくるのかは不明であるが、ギブソンは合理性と伝統美が美しいハーモニーを作るポストモダンの時代へと、確実に足を踏み入れたようだ。

やはり、ギブソンはギブソンなのである。

GIBSON GUITAR CORP.,
Nashville
U.S.A.

CONTENTS

Les Paul Collection.....4–9
SG Collection.....10–11
Designer Collection.....12–13
ES Collection.....14–15
Historic Collection.....16–17
Artist & Chet Atkins Collection.....18–19
Acoustic & Blue Grass Collection.....20–21
Gibson Strings & Pickups.....22–23

1991 Gibson Catalogue

Produced by Yamano Music
Design Works: Japan Music Trades
Art Director: Tadamitu Sugawara
Photographers: Yasuo Nakajima, Studio-NOBLE
R. Watanabe
Special Thanks to: Takashi Kawamata
Minoru Tanaka
Player Corporation
Ichiro Kita/Music Ad.
Phototype: Pace 50
Photographs: Special courtesy
by Gibson Guitar Corp.

YAMANO MUSIC Co., Overseas Division
GIBSON GUITAR Corp., Nashville U.S.A.

All rights Reserved.

写真の色と現物の色が違う場合があります。仕様は品質向上のため変更する場合があります。あらかじめご了承ください。

© 禁無断転載

GC. 1990.11/10,000